

東京大学 総合図書館 準漢籍目録

山本 仁編「東京大学総合図書館漢籍目録」に続く待望の続編。本目録は一五〇〇点にも及ぶ準漢籍を整理分類し、書誌的解説と請求番号を示したものである。本編と附録の二部から成り、本編は準漢籍を附録には準漢籍に準ずる圖書を収録。幅広い分野に不可欠の資料。定価一、二六〇〇円

全国紙社説総覧 2008年度版

東京堂出版編集部編 朝日・毎日・読売・日経・産経の全国紙五紙の社説を三ヶ月毎に収録。社説を比較検討し的確に把握できる全四冊セット定価五〇四〇〇円

CD-ROM版くずし字解読用例辞典

山田奨治・柴山 守編 ロングセラীরくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト発売 ◆詳細内容見本進呈 ◆価格二九四〇〇円

時代考証の窓から「篤姫とその世界」

大石 学編 大河ドラマ「篤姫」の場面やセリフを切り口に時代考証に関わった執筆陣が史料を読み解きながら「篤姫」の世界に迫り史実を論ずる。定価二四一五円

仮名草子集成 第45巻

花田富二夫他編 本集成は厳密な校訂をもとに翻刻。第45巻には「統清水物語」そぞろ物語「曾呂里物語」「統著聞集」の作品を収録している。定価一八九〇〇円

東京堂出版 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17 電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746 http://www.tokyodoshuppan.com (価格は税込)

現代詩歌の全体像を総覧する、画期的な三部作！

現代俳句大事典 普及版 CD付き

稲畑汀子 大岡 信 [監修] 鷹羽狩行 俳人・評論家約千人、事項約五百項目を収録。各種の索引も充実。 B6判・768頁・5,040円 [普通版] A5判・768頁・7,140円

現代短歌大事典 普及版 CD付き

篠 弘 馬場あき子 [監修] 佐佐木幸綱 特定の結社に偏らず、歌人・評論家約千人、事項約五百項目を収録。 B6判・768頁・5,040円 [普通版] A5判・768頁・7,140円

現代詩大事典

安藤元雄 大岡 信 [監修] 中村 稔 詩人・評論家約千人、事項約五百項目を収録し、現代詩を総覧する。 A5判・832頁・12,600円



三省堂 〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14 ☎03(3230)9411(編集)・9412(営業) http://www.sanseido.co.jp/ \*表示価格は税込定価

ISSN 0452-3016 雑誌 03787-4



4910037870490 01524

Printed in Japan

国文学 4

特集 青鞮の時代、女性の時代

定価一六〇〇円 本体一五二四円

第五四巻五号 二〇〇九年四月号

国文学 4

日本語・日本文学・日本文化

二〇〇九年 第五四巻五号 解釈と教材の研究

特集

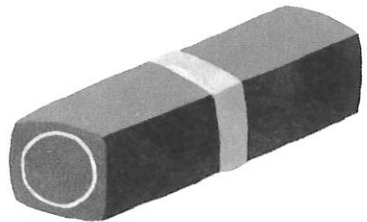
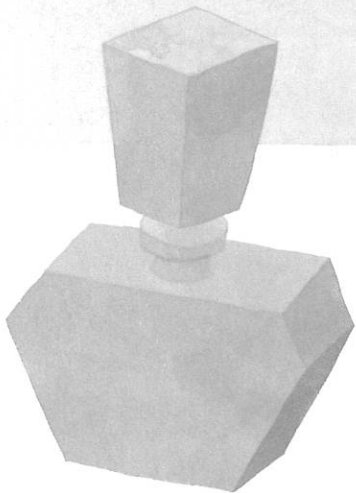
青鞮の時代、女性の時代

一挙50枚掲載 上田篤

平塚雷鳥なぜ「女性が太陽」か？

生田長江／尾竹紅吉／木内錠／高群逸枝夫妻

長谷川時雨／斎賀琴／林千歳



学燈社

# 心意伝承

—遊働世界に生きる—

ほんじょうまさかず  
本莊雅一

第十九回 死に場所で誕生を祝う

## 「型破る」ための教育を求めて

私が高校二年生の学年末終業式の前日に、校長先生が自殺した。

現役校長の自殺という、今でこそ多発しているが八十年代初頭当時としては前代未聞の事件に、マスコミは沸騰し連日各種メディアで報道され、特集やシリーズ連載が組まれた。

「暴力教師・体罰」「しごき授業への反発」「ツッパリグループによる革命」「校舎破壊・放火」「犯行グループの処分をめぐる」「県教委からの圧力と現場教師の決定との板挟みに追いつめられた校長」、そして「教育の荒廃」、などといった文字群が、私に通っていた平凡な高校の「実像」として、書きたてられていた。

クンロール」というヒット曲を出していたグループである。つまり彼ら自身が、自らのアイデンティティーを「ツッパリ」に求めていたのではあった。その是非は措くとしても、モデルを持つ彼らは、それなりに輝いて見えた。その輝きの前では、私も含めた非「ツッパリ」群の生徒の大半の方が、無気力でしょぼい感じがした。しかし、そんな彼らもまた、本当にツッパリ通ず覚悟があったわけではなかった。「権力を振りかざす教師に對して、ひとりて反抗しても処分されるだけ。だから仲間と立ち上がった」と、『蟹工船』のような展開でターゲットにした教師たちと対決し、謝罪させたまでは良かったが、その勢いがやまず、ことあるごとに、元「体罰教師」「暴力教師」にたいして、地元住民の面前でも暴行を加える「英雄的行動」をとりながら、「高校卒業」は保証されるものと思ひ込んでいた。

案の定、リーダー格の生徒が「自主退学」処分となり、仲間の生徒たちにとっては、教師側が「裏切っ」て、再び権力の斧を振り回し始めたと思えた。

ある朝登校したら、校舎中の廊下の窓ガラスが破壊され、壁じゅうペンキスプレーで落書きされ、消化器の粉が一面に散乱しているという、映画の世界のようなあり

また、この事件の因果関係や、その後の「学校再建」への方針模索や、社会的影響などについて、ずいぶんと様々な立場や分野から議論されていた。が、その当時から自分なりに悩み、考えていたのは、そうした集団社会の「健全な運営・発展の仕方」についてではなく、私たちの生命力の問題だった。

私たちは、単に自分の若い生命力の、燃焼のさせ方に迷ってしまったのではないのか。一見まじめな生徒と、問題を起こした生徒とにもしも違いがあるとすれば、生命燃焼のモデルを持っているかいないか、ということにすぎないのではないか。

いわゆる「ツッパリ」と言われていた生徒の多くはその当時、「横浜銀蠅」というロックバンドを、彼らの燃え方のモデルとしていた。「ツッパリハイスクールロッ

さまを目の当たりにした。これだけやれば、さぞかし気持ち良かっただろう、同時に、大きな「権力」とも対決することになるだろう。その覚悟はあつてのことか。

結局、「権力」の行使者になることを、校長は自殺という形で拒否したが、結果的には「校長の死」が、公務員側にとって「権力」行使の大義名分となった。「自主退学（転校希望）」か、「強制退学（学歴剝奪）」かの二者択一を迫られ、実行犯たちは「自主退学」という形で始末されたのである。

そのころは進路について真剣に考えていなかった私は、何か必然のように、「教育」にかんして考え始めていた。

「教育」は、力づくで調教したり抑圧したりすることではあるまい。しかし野放図に若い生命力を暴走させることでもない。前時代の悪夢の記憶を引きずって、「修身」や「道徳」を否定するのもおかしな話だ。「型にはめる」のは良くないことのようにばかり言われるが、いったん「型」を会得しなければ、「型破り」もありえない。はじめからずっと「型なし」ではしょうがない。若いエネルギーが自分も焼き殺すような燃え方、を放置するのではなく、人間の知恵を持って獲得してきた「型」

を伝授しつつ、それぞれの炎が最高に輝くように型破る軌道に到達させる。そんな手伝いをするのが教育なのではないか。

当時はもつとばくぜんとはあつたが、おおよそそんなふうに考えていた。具体的にどうするべきかはまるでわからない。しかし少なくとも、学校ですつと日陰者であり、人前でしゃべることもできない自分は教師には絶対になれるわけがないし、また絶対になりたくない嫌な奴が教師なのであつたが、だからこそ教育を徹底的に考えるべきではないかと、思い始めていた。

### 「人間は生きざまを問われる動物である」

この事件の翌年、心意伝承学の上原輝男が「道徳の発生」という論文を発表した。折口信夫が一九四九年に発表した同名の論文の趣旨を継承したもの。もつともこれはつい最近、二〇〇六年に門下生の一人が発見し、私へも送ってくれたもので、迂闊にも私は全く、存在すら知らなかった。

発表されてから二十三年、上原の死後十年経つてはじめて読んだその論文は、あきらかにあの、高校長自殺事

である。この考えかたからでは、道徳は感情生活と対立したり、抑制したりするという考えは導き出されない。

——(理性と感情という)二元的把握ではない。感情を軸とする生成過程観である。

——道徳が生きて人々を吸引し、行動の動機付けとなる時、その時本来道徳たりるのであつた。人々は、よく許し難いという。

——それは冷たい理性による判断力ではなく、熱い感情に身を委ねてよいとする行動力である。

——怒るといふ人間感情は一体何であつたのだらう。(中略)興奮、特に怒りの感情には、今日の人々は価値を認めない。恐らく暴力に直結することを恐れるからであらう。現代つ子は喧嘩しない。しないというよりできないといったほうが正しい。暴力追放という道徳教育が喧嘩に及ぶ道徳的興奮まで奪ってしまったのである。道徳教育は子どもを無気力化させることか。

——われわれは緊急にこの子どもたち(非行少年や暴力生徒)に告げねばならない。道徳は君らを疎外しない。道徳は、人間情念の在りようを教えてくれ

件を念頭に置いて書かれていた。

落雷にあつたような衝撃を受けた。しかもあの当時幼稚な思考で自分かやもやと考えかかっていたことがみごとに言葉にされ、快刀乱麻を断つがごとし筆致で謳いあげられていた。上原に師事するようになったからあの事件については一度も話し合ったことがなかったのだ、お互いにそうとは知らずじまいだったのである。

おりしも上原の遺稿集『曾我の雨・牛若の衣裳―心意伝承の残像―』(二〇〇六年 暮しの手帖社編集協力)の編集も仕上げの段階で、収録は無理であつたから、急遽「あとがき」で、主要部を抜粋する形で引用した。参考までに、ここに再録する。

——「われわれの道徳に関する考えは、理性に重きを置くが、理性は感情から発している。感情を型としたのが理性で、それが道徳の外郭をなすのであるが、それはどこまでも外郭であつて、本当の力はそのうちの感情にあるのである。」(折口信夫全集十五巻「道徳の民俗学的考察」より)

これが折口博士の道徳に関する基本的な考えかたであるのだということ。そして、親や教師以上に、その暴発ぶりを知っているのは君自身だといわねばならぬ。

——(暴発は)カッコイイどころか、もつともカッコワリイし、イカサナイという価値転換を示唆してやらねばならぬ。

——(火事と喧嘩は江戸の華、という、江戸の人々は)侍、町人いづれにしろ、その時、必ずといってよいほどに、もう堪忍・勘弁・容赦がならぬというのを常としている。両者ともとも忍耐があるから、相手の出方を観察することが可能となり、(その過程があるから)彼等は、喧嘩を達引きすることが出来たのである。

——決して暴発、暴行ではなかつた。  
——生きる志向を確かめ合い、たたかわせずして、どうして道徳の尊厳が求められよう。緊急を要することは道徳教育の方法よりも、人間は生きざまを問われる動物であることを告げることである。

(上原輝男「道徳の発生」『道徳と教育No.241 特集 情操の教育』一九八三年 日本道徳教育学会より 語句補充筆者)

夜にまぎれて破壊したり落書きしたりなどは、恥知らずな集団マスターベーションにすぎない。道徳的興奮とは無縁の暴発・暴行である。同時に、これが現代社会を作った大人たちの鏡であることを、知るべきだろう。

しかしこのエネルギーの発動が、何かもつと建設的に機能する様な軌道を得ていたら、きつとすばらしいものになったであろう。そう思わせるほど、五、六名の高校生にしては、驚くべきパワーを発揮していたとも言えるのである。

戦後の日本人は、人間情念の発動にかんじて、恥を知り名を惜しむといった、前時代的な道徳モデルはことごとく破壊した。西欧文明を範としつつも、神との契約を通じて他者を隣人とし敬うその精神的伝統は無視し、競争原理のイデオロギーにのみ固執することが先進国のアイデンティティーであるとした。そうして子どもたちにも、金銭を主食とした獣性を身につけることを強要した。

拳句の果てが、「ホリエモン」の誕生である。ある意味ではこれが当代の「理想」なのであって、なにも吃驚に値することではなかったのだ。

内面の変化と外形の変化とは、どちらかが原因で他方が結果というふうに、単純な二元分割を許さない。不可分というより、未分化にほぼ近い現象といえる。

こうしたこともやはり庶民向けの芝居や芸能に現れやすく、昨今ならば漫画やアニメの世界がおびただしいほどに、民間心意・心象の事例を示してくれる。

たとえば前回触れた『DRAGON BALL』の主人公、「孫悟空」が、宇宙最強の戦士「フリーザ」との死闘のさなか、親友が無残に粉砕されたショックで「キレ」、伝説の戦士「超サイヤ人」に変身する場面に注目する（次頁、参照）。

それまでは「フリーザ」に対して健闘しつつも圧倒的な戦闘力の差を見せつけられ、ついに滅ぼされるまぎわの逆転劇であった。漫画の画面では「孫悟空」の頭部で「ブチン」とキレる音がして「ゾワツ」と髪の毛が逆立ち、黒から白色（アニメでは金色）に変化する。全身からも同色のオーラが炎のように燃え立つ。これで異常パワーが発揮され、闘いも優勢に転ずるといふ筋である。

特徴的なのは、髪の毛の変化がその人物の資格・霊格の交換とひとつに発想されるところではなからうか。言葉遊びびて言うところ、神の気と交渉する身体部位としての

今は現代評論が目的ではないので、ここで措こう。つまり現在の価値観について善し悪しを区別・評価したいのではなく、それ以前の、もつとも素直な人間生態としての、やむにやまれぬ情動のありさまをとらえたい。興奮や公憤の姿態に目を向けてみることに、それが道徳の本質を追究することになるのだと、上原は考えていたのだろう。

### 髪の毛の変化は人格変換を表わす

ツッパリグループは、いわば「キレ」て、力のやり場を見つけれずに暴発した。通常、「キレ」ることは逆上・暴発とイコールに認識されているが、それは「キレ」る者の内面や外観の急変、および彼らを取り巻く環境・雰囲気の様変わりするほどの威力を指してのことであつたらう。

根本的な次元にたちかえってみると、私たちが「キレ」ると言う時には、もともとは時空に亀裂が入って異界からの鉄砲水を浴びせられ、その場の激変・激動を期待してさえるのである。聖なる崩壊・噴火であつた。その場合、「キレ」る者の身体特徴は無視できない。

髪の毛が、神人交感のありさまを表現していることになつていると言えよう。

「ドラゴンボール」の場合は、もともと身体内に備わっている力、眠っていた力が、何かがきっかけとなって発揮されるという展開だが、逆に、あたかも外部の宇宙エネルギーが身体に充填される状況が起きて、そうした場合の身体象徴として、頭髮が炎上するように描かれる場合もある。

たとえば夢枕獏原作、岡野玲子画『陰陽師』（白泉社）。天徳四（九六〇）年に全焼した内裏の再建計画や儀式が進むなか、主人公の陰陽師「安倍晴明」が、菅原道真や平将門その他の怨霊によって「解かれてしまった天地」を結ぶための地鎮祭として、「安摩」の舞奉納を朝廷へ提案する。許されて準備を進める際、自宅の庭でまづ「陵王乱序」を舞った（次頁、参照）。

右手に短刀ほどの長さの金の桴を持つのは、避雷針ならぬ受雷針とも言うべきもので、舞ううちに天の気を一身に集めてしまい非常に重量が肉体に蓄えられ、頭髮は白熱炎上する、という描き方になっている。岡野流超サイヤ人誕生の場面である。

ツッパリたちの場合は「リーゼント」という髪形で、



藤子・F・不二雄「ドラえもん」(3巻)  
P.10 上から3段、左から1コマ目  
小学館、てんとう虫コミックス、1974

**神人交感の相としてのバサラ髪**  
それにしてもなぜ髪型と人格変換とが密接に結びつくのだろう。  
ひとつ言えるのは、私たちはなぜか、こうした、毛束ねてふさふさしたものをそれ自体に、何か威力を感じてしまうということがある。  
仏具の「**払子**」(筆の毛の部分をやたらとポリリウムアップしたようなもの)はもともとインドでは虫除けの道具であったが、中国の禅宗で邪気払いの法具として用い

固くキメていたが、それ以前の髪型からの変更と人格の変更とをひとつに行なったのであった。色を変更する技術はなかったようで、黒のままでもタリツクなフォルムに強いこだわりを持っていた。これによって、ヤクザやサイボーグ戦士のような威力が備わった感覚を、自他ともにもよおすのである。  
最近の若者はファッションとして髪の色や型を変化させるが、そうしてしまうとやはり人格の変調から自由ではいられない。黒髪の人が茶髪になったと思ったら途端に性格までねじのゆるんだようになるさまもよく見る。髪を毛をいじめることはよほど注意しなければならぬ。



原作/夢枕獯 漫画/岡野玲子「陰陽師」(10巻) P.291  
白泉社コミックス、2001

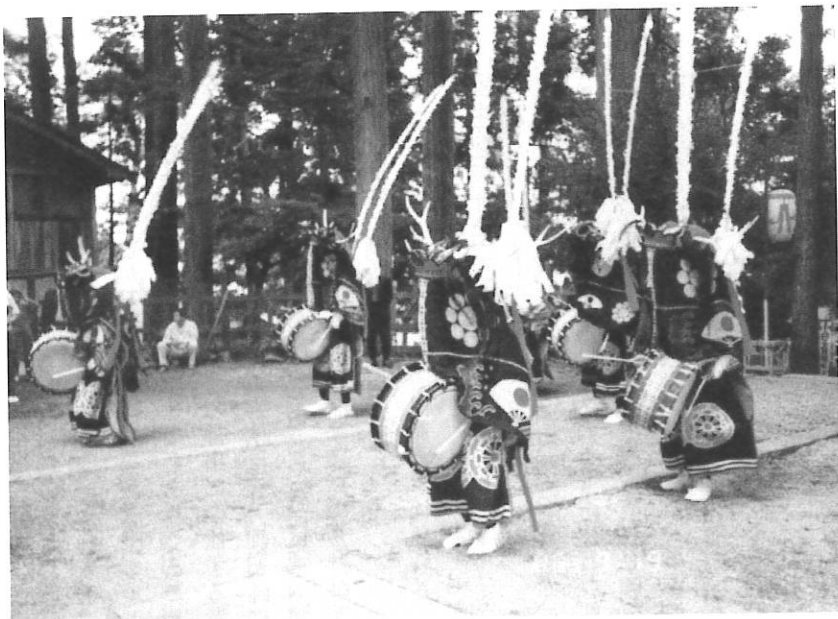


鳥山明「DRAGON BALL」(27巻) P.73  
集英社ジャンプコミックス、1991

られるようになり、それからは日本でも同様の呪具として受け入れられた。神社の神主がお祓いに使う「大麻」も、同じ感覚で用いられる。初期の「ドラえもん」など昭和時代の漫画では、立ち読みする子どもを本屋のオヤジが「はたき」で追い出すシーンがよく見られた。武器としてはこれほど貧弱なものはない。にもかかわらず悪ガキどもを掃き散らすのに効果絶大なのである。私も何度も掃き出された。あれなども**払子**・大麻状の呪具の霊力を無意識に利用した、呪術なのであろう。チャガールたちの「ボンボン」の場合は、応援する選手たちへ霊力を送っていることになる。

さかのぼれば、維新官軍将校の軍装にみられる毛帽子(薩摩藩の黒熊、長州藩の白熊、土佐藩の赤熊)や、武田信玄の「諏方法性兜」に代表される戦国武将の兜など、**虎牛**(唐牛、ヤク)の尻尾で裝飾した冠物が、武将たちには好まれた。戦場という、神気の発動が最大限に要求される時空においてこそ、そうした霊威を感得するアンテナとして、かつ大きなパワーが発揮される炎の暗喩として、こうした乱髪、いわゆる「バサラ髪」の演出が多用されたのである。

戦国時代以前の合戦資料では今のところ管見に入らな



岩手県の鹿踊り



伊勢円座かんこ踊り  
(写真提供 伊勢商工会議所)



伝説方法性兜  
(諏訪湖博物館蔵)



菅間良彦著「図鑑 日本の軍装」下巻より  
(雄山閣 昭和45年)

慶応四年東征軍軍装

（左）長髪、袴、足袋、草履、腰刀、槍、旗  
（右）短髪、袴、足袋、草履、腰刀、槍

いが、この演出の源流は他には求められないだろうか。目を転ずれば、民間の神事・芸能の世界に、バサラ髪を振り乱す所作は多くある。時代的な起源の特定は困難だが、少なくともこの世ならぬ領域との交感・交渉成立の相という心意伝承が、働いてはいるのだろう。

三重県伊勢市で行なわれる「かんこ踊り（シャグマ踊り）」や、秋田県は日本海沿岸部の「なまはげ」、岩手県の「剣舞」、「鹿踊り」など枚挙にいとまがない。多くは盆行事や正月行事の関連神事として行なわれる。まためて言えば、異界の霊たちとの交渉を体感するものと言つてよい。こうした心意をより洗練した形で芸能化したものが、歌舞伎舞踊の「連獅子」や「鏡獅子」ということになるのである。

蛇や毛虫、ミミズなどの長虫のたぐいが夥しく集まつて蠢いていると、それを見るだけでも恐怖のあまり卒倒してしまうことすらある。アニメ映画『もののけ姫』（宮崎駿監督 一九九七年スタジオジブリ）の「タタリ神」も、イノシシの全身から大きなミミズの大群が生えているように描かれていて、十分気色悪く感じられた。これが「タタリ神」という、強力だが墮落した霊格への転換であった。

ともあれ私たちはこのようなものに何やら圧倒的で不気味な生命力を感じずにはいられない。こうした実感が、髪型の変態と人格の変換とを結びつけるのだろう。しかしこうしたことから発する興奮は、そのエネルギーの頂点に達することがイコール死でもありうることを、古人は知っていた。神懸りする神事に奉仕する者や、戦場を往来する武将たちは、生死の境う、剣が峰に立つ。生きとし生けるものの輝きがあざやかに見え、聞こえ、におい、刺さり、味わえる境地に至る。この自覚が、たんなる暴発との区別をなすであろう。

### 死と誕生を表す母衣武者

私たちは「必死に」取り組むとか「決死の」覚悟で、などと普段から口にはするが、もちろん本当に死ぬつもりはない。ところが戦場に出る人々の場合はそうではない。誰もが、ということではないが、はじめから生き伸びる可能性を捨ててかかる人々の話も多い。究極の「キレ」方とも言えようが、ここに私たちは何を感じ取るのだろうか。

こうした、「必死」を決めた姿というのも、強い輝き

母衣ヲ懸テ、鎌倉ヘトゾ趣レケル。」(『太平記』三

一八五頁)

・「佐々木ガ黄旗一揆ノ中ヨリ、大鍛形ニ二様ノ母衣懸タル武者三人、己ガ結タル鹿垣切テ押破リ、『日本一ノ大剛ノ者、近江國ノ住人江見勘解由左衛門尉・蓑浦四郎左衛門・馬淵新左衛門、真先懸テ討死仕ルゾ。死残ル人アラバ語テ子孫ニ名ヲ傳ヘヨ。』ト聲々ニ名乗呼ハツテ、斬死ニコソ死ニケレ。」(『太平記』三 二二二頁)

・紺糸の鎧に紫の母衣を懸けた無名の武者二宮兵庫助、桃井直常と自称して、細川清氏に討たれる。

(『太平記』三 二四〇～二四一頁)

・那須五郎、老母より先祖那須与一が八嶋合戦の際に、扇的の射た時の母衣を送られ、それを懸けて敵陣にかけ入り、討ち死にする。(『太平記』三 二四四～二四五頁)

・芳賀兵衛入道禪可が、嫡子伊賀守公頼を戦場へ送り出すにあたり、円覚寺の長老から賜った袈裟を与えつつ、「是ヲ母衣ニ懸テ、後世ノ悪業ヲ助カレ」と告げる。太平記著者はこれを評して、「禪可最愛ノ子ニ向テ、只討死セト進メケル心ノ中コソ哀ナ

を放つ。「命を粗末にするべきでない」とは思いつつも、その「必死」「決死」の姿を、闇に煌く華として、私たちは心に刻印してしまうのである。

こうした激しい生命燃焼の、具体的な語られ方は多岐にわたるが、なかでも、「必死」「決死」の相でありながら同時に生命誕生の形を表すという、おそらく世界的にみても稀有な存在に注目しよう。

それは、源平争乱のころから様々な軍記物や絵巻物に何度も登場する「母衣武者」である。ことに集中的に語られている『太平記』を取りあげてみる。

まずは七十三歳の老武者であるが、「朝霞ノ晴間ヨリ、南ノ方ヲ見ケレバ、紺唐綾威ノ鎧ニ白母衣懸テ、鹿毛ナル馬ニ乗タル武者一騎、赤坂ノ城ヘソ向ヒケル」(岩波日本古典文学大系『太平記』一 二〇〇頁)と、単騎のまま敵陣に打ち入って壮絶な最期を遂げる。

この記事を皮切りとして、『太平記』では、決死の母衣武者が次々と登場する。いくつか列挙してみよう。

・設楽五郎左衛門尉、薄紫の母衣を懸けて、討ち死に。(『太平記』一 二九四頁)

・新田義興・義治、「混ヲ討死セント志シ、思々ノ

レ」(『太平記』三 二八八頁)と云う。

このように、「死兵」となることの証拠のように、母衣を身に付けることが描写されるのであるが、母衣とはそもそもどんなものか。

母衣武者姿の実物は、埼玉県入間郡毛呂山町出雲伊波比神社流鏑馬神事で目の当たりにしたことがある。「馬乗り子」という正装した地元中学生が、母衣を懸けて騎乗した姿は、ほんとうに息をのむほど美しかった。お祭りが始まる前にくつろいでいた時の彼らは普通の幼い中学生だったが、騎乗した瞬間に人相も姿勢も気配も変わったのである。

「ほろ(母衣・保侶・幌・纒)」とは、『日本国語大辞典』(小学館)によると、「軍陣で、背にかける大形の布帛。流れ矢を防ぎ、存在明示の標識にもした。(中略)室町時代のころから風にくらんだ形を示すために竹や鯨骨製の母衣串を入れるのが例となった」とあり、図版のごとく背中に運動会のくす玉のようなものを背負った形になる。

「ほろ」に「母衣」という字を当てる意義については、物集高見編の百科事典『広文庫』(一九一六～一九一八年



毛呂山の流鏝馬 母衣を懸けた乗馬り子（右）  
川越ほろかけ祭り 八幡神渡御に供奉するホロ（左）



刊)をひくと、「胎内の子のつゝまれし胞衣なり、比丘僧の袈裟あげまきも是れなり、(中略)生る時にも是れを生衣の始とす、死する時も是れを死衣の終として著する(後略)」という「軍用記」の記事が目にとまる。諸説あってこれが定説というわけではないのだが、「母衣」が胞(胎盤)であり、母胎であるという感覚は広く民間に共有されていたようである。

たとえば埼玉県川越市古尾谷八幡神社例祭「ほろかけ祭り」が、そうした意識の具象化として分かりやすい。

八幡神の渡御にあたって、「ホロシヨイコ」と呼ばれる九歳前後の少年が、大きな花傘の造り物の中にすっぽり入ってそれを背負い上げ、右へ回転、左へ旋回、また右へ、ときりきり舞いつつ神輿に供奉する。この花傘が、「母衣」と呼ばれる。これを元服式とか出陣式などと解釈するのが一般的だが、何のことはない、産道を練りうごめいて新しい生命が誕生する過程ではないか。

ついでながら『古今要覧稿』器材部「ほろ」の項に、この言葉自体の起源を「日本武尊」の歌に求める説がある(第二巻 四七三頁 原書房)。「古事記」でヤマトタケルが伊吹山の神に敗れ「能煩野」に斃れる際に詠んだ「國思ひ歌」を指す。

倭は 國のまほろば たたなづく 青垣  
山隠れる 倭し うるはし

この歌の「ほろば(まほろば)」とは、鳥の翼の中でも、特に脇の下を覆う保呂羽(摩倍羅摩)のことで、大和盆地の山並みを、国を覆い隠す翼にたとえているというのである。

批判されもしている説だが、「ほろ」が、何か貴重なものを内蔵する感覚をもって語られる言葉であるのは間違いないだろう。

### 祝祭空間への転換

軍記物の世界に語られる、決死の戦に、まるで戦死する作法のように母衣を懸けることをするのは、いったいなぜなのだろうか。

『古事類苑』兵事部所引の『本朝軍器考』には、「古ノ兵ハ最後ト思フ軍ニハ必ズ母衣ヲモカケ、又母衣カケシ人ノ首ヲバ、其保侶ギヌ添テ、大將軍ヘ進ラスル事ニゾアリケル(後略)」(一九二頁)とあって、こうした母衣には、持ち主の名前などの個人情報に記載しておくも

のであると言う。

討たれた首を、その人の母衣で包んだかどうかは確認できなかったが、少なくとも首と母衣とはセットにすべきもので、切り離してはならぬ作法は確実にあったらしい。一つの解釈としては、死んだものを「胎内」に戻すことで、再生を促す呪術を施すのが、戦死者への作法、供養となると言えようか。少なくとも、再生せぬように滅ぼしたり封じ込めたりするものとは言えない。

いかなる場合にも同様とは限らないから、なおのことそう思ってしまうのである。たとえば死者の霊を護国の神とか御霊神として祀る場合は、一見死霊へ最大級の敬意を表しているように見えるが、実は再生を禁じて、その霊力を現世に都合のよいように利用させてもらう意図が含まれてもいる。

母衣武者の場合は、その勇猛さをたたえられはするが、戦死後の遺体処理について、軍記文学ではほとんど語られない。なので何とも言えないが、また個人的感想にすぎなくなるかもしれないが、たとえば腹を掻き切つて臓物をつかみだし、敵に投げつけるといったすさまじい死にざまにくらべて、なんともさわやかなのである。そう、何のしこりも残らない死にざまと言えよいだろ



うか。  
生死一如の境地と、言うのは簡単だ。さればそれは、具体的にはどういう境地なのだろう。

生き残った側が、母衣武者の首なり遺体なりに保侶衣ほろうぎを添えるというのは、死んだ母衣武者が示していた作法への、答礼なのかもしれない。

彼の示す誕生と死去の一元的振る舞いは、戦場での、敵と味方の対立をも一元化するものではなかったか。桃井直常ももいなおつねと自称した無名の武者二宮兵庫助にのみやひょうすけの例にはつきりと表れていたが、彼は敵を一兵たりとも殺傷していない。むしろ敵将が意外に思うほど、たやすく討ち取られている。ほかの事例も、少なくとも『太平記』の記述の上では敵を殺傷したと明記されてはいない。

決死の母衣武者は、憎悪や怨念、妄執をまき散らさず、むしろ誕生の輝かしさを発揮した死の舞を、敵味方すべての人々にふるまうて、相手の弓や刀槍を喜んで身に受けるあざやかさ、さわやかさを表わしているように思われる。これほど浄化した靈魂ならば、いざれ再生してくれてもよいと思わせられるのではないか。

ふつうに従軍させられるものにとって、合戦とは、本来何の因縁も恨みつらみもない者同士が、血みどろにな

なければならなくなるような場面は、基本的には、ない。

しかし、だからと言って死者の数も少ないかと言えば、そうとも言えないのが現実である。

第二次世界大戦のような、歴史上最大規模の死者・行方不明者が出た時の日本の被害は、高校生向けの日本史教材によると、軍属の死亡・行方不明が約百八十四万人。民間人約六十六万人とある（『詳説日本史研究』四二五頁 山河出版社）。これは戦時の一九三九年から一九四五年の六年間の戦争被害の総計であるから、ほかの原因による死亡も含めた一年間あたりの死亡者数に直すと、また大いに異なる数値になるはずではあるが、無理を承知で次のデータと比較してみたい。

# 俳句

4月号 3月25日発売  
定価890円(税込5%)

特別作品50句 ●大串 章  
作品 ●高野ムツオ・西村和子・能村研三・対中いずみ ほか多数

## 大特集

### 俳句の挨拶性を見直す

- 芭蕉の挨拶句……井上弘美
- 虚子の挨拶句……山内蘭彦
- 万太郎の挨拶句……相子智恵
- 山本健吉の「挨拶と滑稽」を読む……木内 徹
- 挨拶句と前書……岩岡中正
- 私の挨拶句……山上樹実雄・鍵和田柚子・岩淵喜代子 ほか

## 実用特集

### 例句で覚える難読季語

- 《角川21世紀俳句叢書》小特集
- ◆恩田侑布子句集『空塵秘抄』
- ◆佐怒賀正美句集『悪食の糞』

### 俳人協会各賞決定!

受賞作30句抄/受賞第一作ほか

## ▼ 充実の好評連載 ▼

今日も俳句日和 ●石田郷子  
子規の内なる江戸 ●井上泰至  
名句合わせ鏡 ●岸本尚毅  
郁良と楽しく文語文法 ●佐藤郁良  
エゴジスト一茶 ●マブソン青眼  
現代俳句の挑戦 ●高柳克弘

## [合評鼎談]

本井 英・今井 聖・高田正子  
読者投句欄 ●10選者の共通選

発行:角川学芸出版  
TEL.03-3817-6961  
発売:角川グループパブリッシング  
TEL.03-3238-8528

りながら殺し合う惨劇の舞台である。逃れられないのでやむを得ず、これを究極の熱い人間関係としてとらえてみる。戦場とは、いくら戦略を練っても基本的には遭遇戦の場であり、つまり偶然現れる無差別殺戮世界である。ならばそこに居合わせてしまったことを最大の縁とし、「骨まで愛し」あう交合まじりあひとして励むしかない。職業軍人などない時代の兵士ならば、戦場にあつて正気を保つにはそれくらいに観念しなければならなかったであろう。あるいは自分の死の可能性に関して全く鈍感になるか、いつそ発狂してしまうかである。

母衣武者はこうしたいはずれからも解放された死にざまを生きとおした。血なまぐさい戦場を、「恨みつこなし」で名をあげる、生命誕生の祝祭空間へと転換トランスフォーメーションさせたわけであった。

## 「死」に至るつとめるコンステレーション

こうした母衣武者のような「生きざま」は、一見私たちに関係のないもののように見える。幸い、命のやり取りをするような熱い戦争は、日本では六十年以上、全く起きていないからだ。だからリアルに決死の決断をし

厚生労働省のホームページで公表されている「人口動態総覧の年次推移」によれば、戦後の混乱がおさまらぬ昭和二十二（一九四七）年の年間死亡者数が約百十三万八千人。つまり戦争被害のないさまたまな分野の死亡者合計でも、一年間で、戦争六年間の軍属死亡者総数に接近している。

ただその後昭和二十三年以後は百万人を切ってどんどん減ってゆくが、昭和五十四（一九七九）年の約六十八万九千人を最小数として翌年から増加し、平成十五（二〇〇三）年には五十五年ぶりに年間死亡者数が百万人を突破、約百一十五万人となった。その後も増え続けて平成十八（二〇〇六）年は約百八十六万人である。戦後間もない時期の死亡者数にどんどん近付いて行っている。

もっともこの数の半分以上は、七十五歳以上のいわゆる「後期高齢者」死亡者数であるから（三菱総合研究所ホームページ）、医療の問題として対応すべき点が大いのだが、そのほかにも無視できない数値がある。

それは、自殺者数である。

警察庁の統計によると、明治三十二（一八九九）年の約五千九百人から昭和十一（一九三六）年の約一万五千人までは増加するが、戦時中はかえって減少。戦後再び増加傾向となつて、平成十（一九九八）年からは十年連続で三万人を超えているというのである（「自殺対策支援センターライフリンク」ホームページ）。

戦時中の死亡者数に近付いているだけでなく、戦時中以上に、自殺する人が増えている。戦時の倍以上なのだ！

私は自殺抑止を目的とした議論を用意しているわけではない。不要というのではもちろんない。ただその専門家も多いので今は譲る。ここで指摘し、次回考えたいのは、戦国時代とは真逆の平和な世の中であるはずなのに、自ら命を絶つという窮極の場面に身を置くことをやめられない、という心性の在り方である。

人間関係や環境などの様々な要因はあれ、ともかく自

殺を実行する磁場から自由ではない。「死」そのものばかりでなく、「死」を話題にすることすら忌避する世の中になって、むしろ「死」に至ろうとする状態<sup>コンステレーション</sup>が増えているのが事実である。事情はどうあれ、自殺者の大幅な増加が、この事実の認識を私たちに迫っている。あまり適切な設問表現ではないかもしれないが、私たちは、「死ぬこと」に何を期待しているのだろうか。

## 日本は、



世界9ヶ国インタビュー集  
『世界が読み解く日本』

四六判・ソフトカバー・264頁  
定価1995円（本体1900円）  
ISBN 978-4-312-70101-5

# こんなに面白い。



ドナルド・キーン(アメリカ)



徐一平(中国)



ボナヴェントゥーラ・ベルベルティ  
(イタリア)



アンドリュー・ガーストル  
(イギリス)



セップ・リンハルト  
(オーストリア)



アンヌ バヤール・坂井  
(フランス)



アンドリュー・ガーストル  
(イギリス)



タチアーナ・サカロヴァ・デリューシナ  
(ロシア)



ロイヤル・タイラー  
(オーストラリア)



ジャクリーヌ・ピジョー  
(フランス)



東京都新宿区西早稲田3-5-10  
〒169-8608 03(5228)7154

學燈社

<http://gakutousya.co.jp/>